

Human ヒューマン

2014.6 Vol.03

CONTENTS

02 対談 人文学部新カリキュラム

人文学部長 郡司 淳 教授 × 前人文学部長 安酸敏真 教授

04 人文学部 TOPICS

日本文化演習／国際文化演習／石巻で続く小さなボランティア活動／被災した文化財を救おう！／北の映像ミュージアム

06 ゼミ紹介

日本文化学科 中川かず子 3年ゼミ
英米文化学科 田中洋也 4年ゼミ

07 新任教員紹介

大森一輝 教授／仲松優子 准教授

08 2013 年度 卒業研究コンテスト 留学状況

09 2013 年度 卒業研究題目一覧（一部） 資格取得状況

10 OB インタビュー 名鉄観光サービス(株) 武田和也さん

11 Essay 「団子より花」の話から 迫塩千尋 教授

裏表紙 入試情報／就職情報

文化の手をとり、
羽ばたこう世界へ

対談

人文学部新カリキュラム

郡司 淳 安酸 敏眞
教授 教授

新カリキュラムのスタートにあたって——

自分が何者かを発見する一歩を
踏み出すために、学科の枠組みを
縦横に越境しながら、人間と文化を考察し、
自分で自由に勉強の地図をつくっていく。

前人文部部長
英米文化学科教授
安酸敏眞
Yasukata Toshimasa

人文学部長
日本文化学科教授
郡司 淳
Gunshi Jun

コーディネーター
日本文化学科教授
田中 綾
Tanaka Aya

大学とは、自らが考えるための知の宝庫である。そこで学ぶということは、
いかにして自分でものを考えられるような人間性を身につけるかということでもある。
大学本来の姿を取り戻すべく、2014 年度からスタートした人文学部の新カリキュラムは、
どのような理念に基づき、どのような改革を行ったのか。
自分で考える人文学へと誘う、前学部長と現学部長が、新カリキュラムにかける思いを語る。

大学の学校化に歯止めをかけ、
大学本来の姿を取り戻す。

田中 2014 年度からの新カリキュラムについて、長い時間をかけて精査されてきたわけですが、どのような考え方でカリキュラム編成をされたのでしょうか。

郡司 われわれは一昨年、当時学部長だった安酸先生のリーダーシップと基本的理念のもとに、新カリキュラムについて本格的な議論を開始しました。いま、全国の大学では、ユニバーサル化への対応として、「スキル」と称して勉強の仕方を基礎ゼミなどで懇切丁寧に教えています。しかし先生は、それは大学の学校化であって、そもそも大学は学校ではない、とおっしゃった。新カリキュラムでは、大学本来の姿を取り戻すべきだと。われわれはそこに共感したわけです。そうした方法では、真の意味でユニバーサル化に対応できない、ということです。

安酸 自明性を疑ってかかるのは、学問にとって非常に大切なことなんです。自明なことは、私たちは当然視して深く考えません。既成の知識を教える高校までと違って、大学で学ぶことには必ずしも答えがあるとは限らないし、まだ答えが出ていないものに挑戦していくという側面も持っています。一方で、大学が高校の延長のような性格を持つようになって、リメディアル教育がしきりにいわれています。そういうのは大学で

はないという思いで、高校までとは明らかに違うということを学生に意識づけ、高校や予備校の先生の延長みたいになっているわれわれ教員もそういった意識を共有していかなければと思ったわけです。

郡司 学生には、十分自覚的でなくとも、よりよく生きたいという根源的な願いのようなものが絶対にある。それが学ぶ力の根底にある。大学がそれに応えるためには、手取り足取り教えるのではなく、どのように成長を促すかが重要だと考えるわけです。たとえ、当初は稚拙であっても、自分の頭でものを考え、自分の文章や言葉で表現することが大切で、一步一步そうした体験を積み重ね、その過程で得たものを次の勉強に活かしていく。つまり自分で自分を成長させるしかない。そのためには教師が教えすぎないことも必要です。今回、ゼミを中心とした基幹科目を柱に、導入科目（1 年）・基礎科目（1 ～ 2 年）・展開科目（3 年）・卒業研究（4 年）という学生の成長に配慮した段階的な科目編成を採用した理由も、ここに 있습니다。



学科の枠を超えた双方向的なカリキュラムで、4つの文化に対するアプローチの仕方を学ぶ。

田中 新カリキュラムでは、具体的にどのような変更を行ったのでしょうか。

郡司 グローバル時代を見据え、これまで以上に、文化理解の双方向性という点に意を用いました。英米の学生は、英語をひたすら勉強するわけですが、足元を見失いがちです。英語を話しても、己を知らない外国人とのコミュニケーションは成立しないし、そもそも外国の文化を理解できるのか、疑問です。日文の学生は、日本文化について世界に紹介しようにも、外国語がしゃべれない。そこで、できるだけ他学科の授業を履修できるようにしました。そのうえで、学部横断的に〈言語文化〉〈思想文化〉〈歴史文化〉〈環境文化〉という4つのアプローチの仕方でも文化を学べるようにし、学生の幅広い学びと専門性を両立できるように工夫しました。学科や専門の枠組みを縦横に越境しながら、人間と文化を考察していく。そのようにして、自分で自由に勉強の地図をつくっていけるようにしました。

安酸 日本の大学は最初から〇〇学部〇〇学科という形で入ってくるので、縦割りの弊害もいわれています。私たちは日文と英米の2学科が一緒になって、まさに人文学という共通の土俵で考え、ふれあうということが必要なんだと思ったわけです。

郡司 英米文化だけ、あるいは日本文化だけを勉強すれば、何かが解るのか、認識できるのかというと、おそらくできない。英米と日文の学生が共に学ぶことで、そうした点に気づいてほしいと期待しています。

課外学修としては、海外研修やフィールドワークをさらに充実させました。実際に自分の目で見たり、耳で聞いたりして他者との出会いを経験する。英米に限らず、日文の学生にも、ぜひこの制度を利用して留学してほしいですね。

グローバル化に対応したコミュニケーション能力という点では、語学力はもちろん基本で、英語に限らず、1つは外国語を身につける必要があります。そのうえで、異文化理解とは、それぞれの立場の違いを認めながら、そこから共通性としての普遍性を発見していく、創り出していくもの。そのためには、他者を重んじて対話を積み重ねるしかない。私は、そうした姿勢こそが、コミュニケーション能力の基礎に置かれるべきだと思っています。

安酸 他者＝自分と違う存在に触れて、初めて自分というのが分かる。異文化体験とは、究極的には改めて自己認識を持つことだと思います。日本に留まっている限り、自分が日本人であるという認識は起こらない。「異国にあった者が初めて自国の何たるかを知る」という言葉もあるし、ゲーテも「外国語を知らない者は自国の言葉を知らない」といっています。だから、若いときに自分から外に出てみることは、自分が何者かを発見する第一歩になるはずです。

郡司 ゼミに関しては、1年生の人文学基礎演習に続き、2年生で人文学演習を履修します。これも専門のゼミではなく、その前提となる人文学的な素養を身につける機会として捉えています。3年生では、いわゆる専門演習を4つの分野に即して展開し、4年生には演習を置かず、自分で課題を設定して卒業論文という形で解答を得る。今後は、自分で勉強しない限り卒業できないという考えを徹底させていこうと思っています。基礎ゼミでは、学生に疑問を持ち、自分でそれを解決していく大切さを理解してほしいという思いを込め、「自分」で考える人文学」という学部独自のテキ



ストを新しくつくりました。学生には、今後どのようなテーマをとおして人間や文化について探究していくのか、このテキストを通して考えてもらいたいですね。

田中 1年生の後期には、安酸先生が新しい講義として、人文学概論を開講されることになりました。

安酸 人文学概論では、『新しい人文学の地平を求めて』という書下ろしの教科書を使って講義します。そして力点は、「自分で考える人文学」に置いています。自分で考えるということは、ドイツ語でゼלבストデンケン（Selbstdenken）といいます。人文学でいろんな知識を学びますが、いちばん大切なことはやはり自分でものを考える、つまり鵜呑みにしない、自分の目で確認することです。人文学＝Humanities ですが、私たちはいかに自分でものを考えられるようになるか。それが人文学部における4年間の教育の、さわめて重要な部分を占めている。学生が自分の勉強をし、専門的な研究をするための基盤づくりに役立つ授業にしたいですね。

新しい輝きを発する人文学で、自分の生き方を追求する力を養う。

田中 最後に、受験生に対して一言お願いします。

安酸 大学というのは学ぶところであり、そこで一生懸命に学ぶ人のことを学生というのであって、モラトリアムを楽しむ場所ではないはずです。卒業するのは楽じゃないけれども、人文学部で4年間しっかりと学べばちゃんとした力がついて、一定の付加価値をつけて社会に出ていくことができる。私たちの学部学科は、それをウリにして、自分で力をつけることができる大学にしたいと思っています。

郡司 人文学部が目指すのは、人材教育ではなく、人間教育です。現代では、特定の何かに役立つ知識や技術の賞味期限は非常に短いし、社会の枠組みやありようもいつどのように変わるかわからない。そうした予測不能な時代に自分の生き方を追求するには、やはり人間基礎学である人文学を身につけるしかないと思っています。

安酸 教養というのは、元の言葉＝パイデア（paideia）に遡って考えれば、人間形成という意味なんです。人間は、生まれたときはヒトであり、教養を得て人間になっていく。人間形成に関わる教養をより専門的に深めていくのが人文学で、あらゆることに関わってくる学問であり、本来ならばすべての大学生が学ばなければならないことなんです。人間が生きていくということは、たえず人間とは何か、人間として生きるとはどういうことかに直面するということ。それは就職に直結しないようでありながら、そういうことをしっかり考えていける人間は、どんな職場でも役に立つ。具体的、実践的なスキルは、人間としての基本的な力があれば、あとからいくらでも身につけることができる。そういう意味で、人文学はいまの時代にこそ新しい輝きを発している。まさに新人文の時代が、いま来ているんです。

郡司 学生には、大学4年間で学ぶことの充実感を味わってほしい。自分で一生懸命考えた末に、結局答えは自分の中にある、創るわけだけど、それを発見する喜びは何ものにも代え難い。その喜びを糧にしていけば、将来社会で壁にあたっても、乗り越えていけるのではないかな。そうやって、人間としてあるべき姿や自分の幸福を自覚的に追求していったらいい、と願っています。



人文学部 TOPICS

日本文化演習

異文化を理解しようとするとき、その土地を歩き、そこに生きる人たちと交流するように、日本文化の理解にも、歴史と伝統が息づく土地を実際に訪れてみるのが不可欠です。明治維新以前の千数百年の間、京都は日本の中心でした。人文学部日本文化学科では例年、京都に奈良、大阪を含めた関西圏をめぐる研修旅行を実施しています。教員による事前の講義、そしてグループ発表を経て、約一週間、寺社をはじめとする重要施設の見学や体験学習を行います。研修旅行後、受講者は各自レポートを作成し、『日本文化演習報告書』に一人ひとりの学習成果が掲載されます。



祇園新橋伝統的建造物群保存地区



国際文化演習

グローバル化が進んだ今日、英語の習得は専攻、職業を問わず必須要件になりました。どこに行っても、どこで働いても、英語ができれば意思疎通が可能です。カナダの二大学（ブロック・レスブリッジ）で実施する語学文化演習は、高校までの英語を実際に使える英語に転換する第一歩になるはずです。とはいえ、この演習の目的は、英会話力の習熟に尽きません。異文化体験を通して異なる価値観に眼が開かれるとき、自ずと自分たちの文化を再認することになるのです。2014年度の入学生から、両学科の全学年の学生に参加資格が与えられました。安心できる環境で短期留学を経験できる絶好の機会です。

※2014年度からは、「日本文化特別演習」、「英米文化特別演習」として開講されています。

石巻で続く小さなボランティア活動

東日本大震災の衝撃は、海を隔てた北海学園大学の学生たちの心を揺り動かししました。その年の10月から、3年生の学生たちが被災地の子供たちと遊ぶ事を中心としたボランティア活動を始めました。最初の年は学生たちが石巻市の仮設住宅の集会場へ行き、学校から帰ってくる子供たちと紙芝居や鬼ごっこをして遊ぶ事が中心でした。

2年目からは、学生たちは活動の場所を津波で全壊した住宅街に移し、地域を復興する活動を始めました。ヘドロにまみれた家の隅々を清掃し、家の周りの瓦礫を撤去し、その合間に子供たちとの遊びも忘れません。最近は数軒の家に灯りがとまり、学生たちが作った花壇には花が咲き、学生たちと子供たちの「ゴミ拾い」も恒例になり、小さなボランティア活動は少しずつ小さな実を付けています。

人文学部の先輩が始めたボランティア活動は、今後も後輩の学生たちによって継承されています。貴方もその一歩を踏み出しませんか？



被災した文化財を救おう！

2013年10月に仙台市と石巻市で文化財レスキューに参加しました。主役は学芸員課程で学ぶ人文学部学生5人です。東日本大震災による深刻な被害は郷土の誇りと絆の象徴である貴重な文化財にも及んでいます。多量の海水や土砂にさらされたため、カビや害虫による損傷が進行しています。そこで、前半は東北学院大学博物館に一時的に避難している牡鹿町の民俗資料の二酸化炭素による殺虫処理を行いました。後半は津波によって学校としての機能を停止した旧石巻市湊第二小学校の2〜3階部分を民俗資料の収蔵施設として転用する作業を実施しました。全国からの文化財の専門家や地元の人たちに交わりながら被災地支援を行う意義をかみしめた数日間となりました。



東北学院大生と一緒に資料配架用の棚を組み立てる

北の映像ミュージアム

雄大な自然と独自の歴史をもち、それらに由来する独特の景観を見せる北海道は映画ロケのメッカです。劇場公開用映画に限定しても、現在まで約400本以上の映画が北海道を舞台に撮影されてきました。このような数多くの北海道ロケ映画やテレビ番組に関する資料を蒐集・管理し、展示している施設が「北の映像ミュージアム」(札幌市中央区北1条西12丁目・さっぽろ芸術文化の館1階)です。人文学部の学生の皆さんにはミュージアムの受付、資料の整理、上映会の手伝いやミュージアムのブログ作成など、ボランティアとして活躍してもらっています。本ミュージアムでの活動を通して映画と関わり、映画関係者と出会うことは(ときどき映画監督もいらしてくださいます)、学生の皆さんの貴重な体験となっているようです。



日本文化学科

中川かず子
3年ゼミ

私達のゼミでは、ここ数年『日本人らしさの構造』(芳賀綾著、2004年)をゼミの基本文献としています。日本語の構造と運用がいかに日本人の文化の型とつながっているかということを読んでいきます。日本人の思考や行動が日本語にどう反映されているのか、あるいはその逆に日本語から日本人を理解することをゼミのテーマとしています。

ゼミには日本人学生のほか、韓国協定校とロシア協定校の留学生が参加していますが、初日の資料があまりに難しいとゼミ参加を諦めるロシア人留学生もいました。欧米の留学生にとっては日本人学生と同じレベルで日本語を聞き、話すというのは確かに難しいです。しかし、自分の考えを发表しようという態度は留学生に多く見られ、日本人学生に新鮮で刺激的に映るようです。

さっそく二日目の授業では、日本人の自然観がどのような日本語や事象に現れるかということで議論しました。テキストには、春風、花曇り、花吹雪などの春を感じる言葉のほか、四季の表情を示す言葉が並びます。学生達の季節の好みは様々でしたが、留学生と同じように夏を好む日本人学生が比較的多かったのは意外でした。花見や月見といった情緒のある春や秋



を好む日本人が多いと思ったからです。それでも、桜前線、八百万の神、パワースポット、枯山水の庭園(造成法)、多様な雨に関する語彙、海の幸・山の幸といった言葉や事象が学生達の口から出てきて、やはり日本人と自然との一体感は若い世代にもあると感じました。次週のテーマは日本人の対人関係の理解につながる日本語の語句の解釈です。配慮ゆえにもの言わぬ日本人は、異文化間にあっては誤解を生じさせます。そんな日本人の対人コミュニケーションを留学生とともに考えていきます。

こうして日本人の精神性、文化性と言葉の関係を日本語の文法、語彙、言語行動から具体的に捉えるわけですが、歴史的、比較文化的な視点も加わるとより理解を深めることができるでしょう。何よりも大事なことは、ゼミを通して学ぶ日本語と日本人の再発見です。

ゼミ紹介

英米文化学科

田中洋也
4年ゼミ

田中洋也ゼミは、「外国語学習」に関して「学ぶ立場」と「教える立場」の両方からアプローチします。多くの人にとって第一言語(母語)は成長とともにいつのまにか身についてしまいます。対して、第二言語は多くの人にとって楽をしていつのまにか習得できるものではありません。日本における英語学習のように、第二言語を外国語学習環境で身につけるには、どうすれば良いのでしょうか。ゼミでは、この大きな課題に参加する学生の関心や進路希望に引きつけて、特定テーマに焦点を絞り、卒業研究に繋げることを目指します。

ゼミの参加者は、中学校・高等学校の英語教員を目指す学生、英会話講師を目指す学生、英語力を活かした仕事ができる企業への就職を目指す学生、大学院進学を目指す学生など様々です。そのため、学生の卒業研究も「ポッドキャストを用いた英語学習」、「英訳コミックの多読による英語学習への効果」、「音楽を用いた英語教育の可能性」、「日本人英語学習者の語用論的意識と語彙知識の関係」、「ホスピタリティー産業における英語使用」など多岐にわたります。第一期ゼミ生の進路は海外留学、大学院進学、民間企業就職、英語教員とその多様性を反映したものとなりました。

2014年度は、応用言語学の入門書をテキストとしてグループでのプレゼンテーションとディス



カッションを中心に学生主体でゼミを運営しています。プレゼンテーション、ディスカッションとも英語で行い、英語力、コミュニケーション能力の向上を目指しています。また、数週に一度は、同じテキストを扱う米坂スザンヌゼミと合同でゼミを開催し、テーマへの理解を深めています。さらにこうした学びを通じて得た知見を現実的な課題にどのように活かせるのかを考える機会として、中学校・高等学校の英語授業見学なども行っています。

母語の習得も外国語の学習も誰もが通る、一見、ありふれた日常の経験です。そのありふれた経験を違った角度から眺め、課題を設定して真実を解明して行くことは、研究に限らず様々な現実の問題を解決する力を私たちに与えてくれます。学生のみならず卒業後に新たな課題に対峙した時に、その解決に役立つような力を身につける一助になればとの思いでゼミ生の活動を応援しています。

新任教員紹介



英米文化学科 教授 **大森 一輝**

Omori Kazuteru

担当科目：人文学基礎演習、英語文献講読、アメリカ史概論、演習Ⅰ～Ⅳ

4月から英米文化学科の教員になりました。専門はアメリカ史です。3月に、これまでの仕事をまとめて、『アフリカ系アメリカ人という困難—奴隷解放後の黒人知識人と「人種」』という本を出したので、詳しくはそちらをご覧くださいのですが、アメリカにおいて黒人であるとはどのようなことであり、どうすれば「人種を乗り越える」ことができる（と考えられてきた）のか、をテーマに研究を進めてきました。今後は、中国系移民など他の集団との比較

や、目の見えない人にとっての人種（≒肌の色）の意味、などの視点から、近代社会における人種主義をさらに解きほぐすのが目標です。

小樽出身で（子どもの頃には、父の転勤で、釧路や札幌や砂川にも住んだことがあります）、北海学園大学には親しみを感じていました。32年ぶりに帰ってきた北海道で、私なりに地域に恩返しをしていきたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いいたします。



英米文化学科 准教授 **仲松 優子**

Nakamatsu Yuko

担当科目：人文学基礎演習、英語文献講読Ⅰ・Ⅱ、ヨーロッパ史Ⅱ、演習Ⅰ・Ⅱ

2014年4月に人文学部英米文化学科に着任しました。授業では、「ヨーロッパ史Ⅱ」などを担当しています。私の専門はフランス史で、現在はおもにフランス革命前後の地域と国家権力の関係を研究しています。「地域」の視点ということで、私の場合は、フィールドを南フランスのラングドック地方に設定しています。ラングドック地方は、私の研究している時代においても、オック語という地域言語を保持しながら独自の文化を形成し、国家権力にたいして一定程度

の政治的・経済的自立性を確保していました。中央集権化がはやくから強力にすすめられたとイメージされがちなフランスですが、ラングドック地方といった地域からみると、フランスの歴史はどのようにとらえなおすることができるのかということが、私の研究テーマです。授業では、その一端をお話しし、現在のフランスやヨーロッパにみられる地域主義運動や多文化主義についても、考えるきっかけとなるようつとめています。



ラングドック地方の北部山岳地帯ヴィヴァレ

2013年度 卒業研究 コンテスト Graduation work Contest

人文学部では、卒業研究を提出した4年生を対象に、「卒業研究コンテスト」を実施しています。記念すべき第一回には、自薦、他薦を含め25名に上る応募がありました。厳正な審査の結果、最優秀者1名、優秀者3名を選出しました。受賞式に先立って受賞者4名が研究内容をプレゼンテーションすると、会場に詰め掛けた多数の在学生が真剣に聞き入っていました。人文学部は、学生が学習の成果を発表する機会を積極的に設け、学年のかきねを越えて自主的に学び合う環境をつくっていきます。



佐野亜里沙さん 2部英米文化学科

バイユー・タペストリーと司教オドー

優秀賞



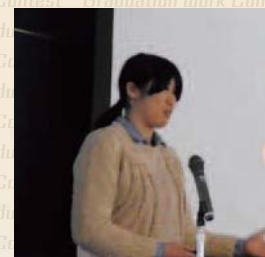
高橋亜里沙さん 1部日本文化学科

川端康成『たんぽぽ』試論
—『桃色の虹』にみる愛情と不安—



山崎 楓さん 1部日本文化学科

万葉集における『もみち』
—文字表記を中心に—



大木七帆さん 1部英米文化学科

Interlanguage Pragmatics:
Japanese EFL Learners' L2 Pragmatic and Grammatical
Awareness in Relation to Vocabulary Knowledge

留学状況

	1部 日本文化				1部 英米文化				2部 日本文化				2部 英米文化				カナダ	韓国	中国	ロシア	欧州	マレーシア	豪州	NZ	米国	イギリス	フィリピン	計(人)
学年	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4												
2011		1	1		1	20	8	1						3		1	31	2	2	1								36
2012		1		3		24	11	6				1		3	3	2	31	6	3		10		2	1	1			54
2013		3			1	10	16	3			1			2	1		20	2	2	1		4	3			1	4	37

* 次の留学に参加した学生を算出しています。
・国際文化演習 ・協定校留学（期間は問わない） ・協定校ではないが、国際交流委員会経由の留学 ・休学期間中の留学
・その他（2012年度のヨーロッパ研修旅行、2013年度のマレーシア旅行）

2013 年度 卒業研究題目一覧（一部）

◆日本文化学科

言語文化 【言語】	●日本人の配慮表現の研究——特徴と使用実態—— ●教育・社会的役割・言葉と仕事からみる女性らしさについて ●『沙石集』のレトリック分析——本地垂迹説に見られるレトリックについて—— ●日本語指導における教科書の意味——日本語教科書から見た教授法の考察——	●中学校における国語教育——「PISA 調査」から見る読解力 ●『名探偵コナン』における関西弁考察 ●韓国における外国人政策の特徴と課題——明洞聖堂籠城事件からの学び——
言語文化 【文学】	●玉鬘十帖——六条院の四季をめぐる—— ●遠藤周作の『深い河』——美津子と大津の宗教についての考察—— ●ドストエフスキーの『罪と罰』における「夢」について ●色彩論から見た遠藤文学における日本とキリスト教——『海と毒薬』を中心に——	●吉本ばなな『白河夜船』における「眠り」の意味について ●安部公房の〈都市〉と〈人〉——「燃えつきた地図」に住む人々—— ●『ふしぎの国のアリス』の翻訳——「言葉遊び」から見る日本の受容——
思想文化	●戦国大名武田家の滅亡に関して ●松永久秀は悪人か——三つの巨悪事の真実—— ●『ハウルの動く城』——宮崎駿のメッセージ—— ●初版グリム童話から読み取る『白雪姫』	●内村鑑三の前反省と「2つのJ」 ●映画タイトル、その目的と効果の分析 ●黒澤明『生きる』研究～「美しさ」とは～
歴史文化	●古代日本人と星～その思想と習俗～ ●渋沢栄一が目指した近代日本の実業界 ●北海道における国民意識の形成——新聞は北海道民をどのように変えたのか—— ●外国人の見た明治日本	●奈良期における女性天王誕生の背景～孝謙・称徳を例に～ ●東日本大震災の被害と対応——震災関連死を中心として—— ●日本人の家族像——食卓にみる家族——
環境文化	●ソロモン諸島の音楽と音楽理論による考察 ●境界技術——自空間を創り出し、他者を受け入れる装置—— ●日本のセーター——本来の意味と地域性 ●河童について	●現代の日中両国における清潔問題 ●妖怪の創造 ●『かくや姫』に関する考察

◆英米文化学科

言語文化 【言語】	●'Why Do Learners of English Misinterpret Antecedents of Reflexive Pronouns?: A Study of Reflexive Pronouns' ●'A Study of Listening Input for English Vocabulary Learning' ●'English Learning and Self-identity Change' ●『英語辞典』からみる近代英語の変遷	●'Extensive Reading using Japanese Comic Books in English' ●'Communication Apprehension in Japanese High School Students' ●社会方言『性別』——言語に見られる女性の在り方——
言語文化 【文学】	●『ハムレット』と『マクベス』——その悲劇性を中心に—— ●『オセロー』と嫉妬 ●The Beatles 論～音楽シーンに与えた影響～ ●Alice's Adventure in Wonderland ～子供から大人まで愛される理由～	●フール（道化）～その本質とシェイクスピア劇における役割～ ●The Wonderful Wizard of Oz——『オズの魔法使い』が長年愛され続けた理由—— ●Sherlock Homes ～永遠のヒーローである理由～
思想文化	●マリア信仰のルーツ——なぜマリアは信仰されるのか—— ●コンピュータ媒介型コミュニケーション（CMC）とネット依存～現代社会のストレスとの関係性～ ●ホメロスが描く神と英雄——『イリアス』、『オデュッセイア』の世界—— ●ファッションにくびったけ—ファストファッションのブランド選好とトレンド—	●中世の魔女狩りと社会的不安——魔女の誕生から終息まで—— ●ロボットと共生 ●哲学者プラトンの対話編『饗宴』の世界観
歴史文化	●アメリカ社会における教育の不平等 ●アメリカにおける二つのフェミニズム運動 ●イギリス王室の危機～ヴィクトリア女王時代を中心に～ ●移民大国フランスにおける移民問題——スカーフ事件からみる移民の実情	●「黒人音楽の誕生と発展——Call and Response から見る黒人音楽の世界 ●ヴィクトリア朝の子どもと文学 ●「人権」とは何か——その歴史と今日の課題——
環境文化	●女性の社会進出から見る「働くこと」に関する意識の変化 ●韓国の犬食文化～食文化の多様性を考える～ ●児童労働と時代の流れ ●東京ディズニーリゾート～9割をリピーターにするディズニーマジック～	●カナダにおける日本文化の浸透とカナダ旅行記 ●2011年東日本大震災後に発生する様々な問題と復興に向けて ●ゾウのイメージはどこからつくられたか

資格取得状況

【修了者人数】

	2011 年度	2012 年度	2013 年度
日本語教員養成課程	66	58	62
図書館学課程（司書）	36	32	47
図書館学課程（司書教諭）	4	6	4
教職課程（中学・高校国語）	13 ※内 2 名は高校のみ	13 ※内 2 名は高校のみ ※内 1 名は中学のみ	19 ※内 5 名は高校のみ
教職課程（中学・高校英語）	11	6	19 ※内 2 名は高校のみ
教職課程（高校地歴）	2	6	6
学芸員課程	15	17	13
社会教育主事	2	5	6

OBインタビュー

O B | i n t e r v i e w

YOSAKOI ソーラン祭りの本学チーム「粋〜IKI〜」の代表を務め、チームに6年間関わって、留年と休学も経験した。そして、小説という初の創作。そこから何を学びとって自分の武器とし、自らを成長させていったのかを探る。

名鉄観光サービス株式会社 札幌支店
教育旅行セクション 営業掛

武田 和也さん

2012年人文学部日本文化学科卒業



人文は人間形成の場。自主性を持って、自分の武器を見つける。

新しく魅力的な修学旅行のコースをつくりたい。

——どのようなお仕事をされているんですか？

教育旅行というのは主に修学旅行を扱うセクションで、北海学園大学では人文学部日本文化学科の日本文化演習やゼミの研修旅行、東北学院大学との定期戦の手配なども行っています。自分の性格は、営業職に向いていると思っていて、もともと旅行分野に興味があったので、在学中に国内旅行業務取扱管理者の資格も取得していました。名鉄観光は最初の営業から、打ち合わせやプレゼン、添乗、精算、次の旅行につなげるためのフォローまですべてに関われるので、分業になりやすい大手よりもやりがいがあると思いました。

修学旅行は、在学中のいちばん大きな行事。そういう思い出に携わり、もともと好きな子どもたちと関わる機会が持てるのもうれしいですね。旅行業界では、教育旅行がいちばんハードだといわれますが、「旅行中の子どもたちの笑顔」や「ありがとう」「楽しかった」という感謝の言葉になによりもいやされます。情報を集め、体験メニューなどオリジナルなものをコーディネートしていくのは大変ですが、定番コースだけでなく、新しく魅力的なコースをつくっていききたいですね。いまの仕事は、やりがいがあって、学べることがたくさんあって、さまざまな人に会える。そして、いろいろな場所に行つての発見を日々新鮮に感じています。



学ぶもののプラスαの発想をし、自分で考える。

——どんな学生時代でしたか？

僕の大学生活は、YOSAKOI とともにあったといっても過言ではありません。やはり祭りの楽しさは格別で、100人以上、裏方も入れると150人ものチームで1つの作品をつくりあげる。その中心でやってみようと思い、代表も務めました。代表時にはファイナル進出を果たせましたし、2011年には準大賞にも輝き、関わった人たちには感謝の気持ちでいっぱいです。実は、YOSAKOI にあまりにも没頭してしまって、1年生のときは授業にほとんど行かず、進級もできませんでした。それで、チーム代表となるとときに、勉強もちゃんとしないと下の人たちもついてこない、自分の甘さを反省しました。でも、アルバイトをするという条件で進学したのに、すべて仕送りまかせ。あまりにも親に申し訳なくて、代表を辞めたあと、一度休学して学費を稼ぎ、学費の安い2部に転部して、復学しました。留年・休学は、大学時代における最大の失敗談ですが、そこから学ぶことも多く、人生経験としてはプラスになったといえるかもしれません。

——人文学部はどういうところだと思いますか？

講義が専門的で、いままでに見たことのない世界。日本語の本質や成り立ちなど、いままで学ぶことのなかった内容に驚きと新鮮さを感じ、より興味も深まりました。田中綾先生のゼミでは創作に取り組み、ゼミ誌と卒論で小説を書きました。日本語のレベルの低さにふがいなさを感じましたが、何度も推敲を繰り返し、できあがったときはとてもうれしかったです。人文は人間形成の場、学んできたことが直接仕事にはつながらないかもしれませんが、自分を成長させることができる場です。自分で課題を見つけ、何をしたいのかを明確にして、講義で学ぶものにプラスαの発想をして考えることができれば、本当に得るものは大きい。自分のやりたいこと、夢中になれるものを見つけ、学生生活を有意義に過ごせば、それが就職活動にも、社会人になってからも生きてきます。ぜひ、自分の武器になるものを見つけてください。

「団子より花」の話から

日本文化学科 教授 追 塩 千 尋



表題を見て「花より団子」の間違いでは、と思うであろう。「花より団子」は「風流よりは実利をとる」(『日本国語大辞典』)という人間の志向性の一面を言い当てた諺で、「団子より花」(という諺はないが)はその逆ということになる。そのような人は少数派で、奇特な方ということになるだろうか。そうしたタイプに属する話をまずは紹介したい。

鎌倉時代の僧侶である無住(1226～1312)が編纂した説話集『沙石集』に、次のような話がある。尾張国に山田重忠という武士がいた。生没年は未詳だが承久の乱(1221年)で京方につき、戦死した実在の人物である。武芸に優れてはいたが、思いやり深い心の持主であった。重忠は、彼の所領に住んでいた一人の法師が有していた八重の躑躅(つつじ)を手に入れたいと常々思っていた。ある時この法師が大きな罪を犯し土地から追放されることになったが、重忠は使者を検断役として派遣し、「罰金として七疋四丈の絹か八重の躑躅かいずれかを課すように」と指示した。使者が出向いて法師にこのことを伝えたと法師は絹を選択したが、使者は主人の気持ちを汲んで躑躅を差し出させた。さらに検断役は役得として罰金の半分を得ることが出来るとして、絹ではなく躑躅を法師に要求した。法師は絹にしてもらいたと願ったが、この使者は半ば強引に躑躅を一枝取った。無住はこの話の締めくくりとして、躑躅を愛でた三人を「共にやさしく(風雅・風流)こそ」と賞賛している(巻9の4)。無住の時代にはこうした風流心を持っていた人が得がなくなっていたため、改めてその重要性を説いているのである。

絹七疋四丈は130mを越す長さになるので、金銭的価値は躑躅の比ではない。それにも拘わらず重忠・使者・法師共々実利は度外視して風流の心を優先したという話であるので、「花より団子」ではなく「団子より花」タイプの話といえるのである。同時に「団子より花」の心を持つ人はいつの時代でも少ない、という世相の一面が知られ興味深い。

私は古代・中世の仏教史を専門としているが、主として当時の人々が有していた仏教信仰の実態を探る事に関心を抱いている。ところが、この課題はなかなか厄介なのである。つまり、人々の信仰を吐露したような史料が少ないためである。そうした状況を幾分補ってくれるのが古代・中世に多数編纂された説

話集で、『沙石集』もその一つなのである。説話集は通常文学作品に分類されるが、歴史史料としても十分活用可能で、特に人々の思想・信仰などを探るには有益である。前近代の日本においては哲学書・理論書に相当する書籍は西洋などに比べると少ないが、文学に相当する書籍は多い。日本人は理論書・哲学書などの直接的な形ではなく、文学という少々回りくどい方法で自分たちの思想を表現してきたといえる。文学は日本人にとっては自己の思想の重要な表現手段の一つであったのである。

以上のような視点で、私は研究・教育において説話集を活用してきた。ここで前述した話に戻りたい。この話は「芳心(親切心)ある人の事」という表題で括られた5話ほどの話の中の一つである。無住は僧侶であるから説話を通じて人々を仏教の世界に導き、その功德を受ける事の必要性を説こうとしていた。「芳心」は人々が指標とすべき徳目の一つで、それが備わる事により仏教も受容・浸透すると無住は考えていたのである。この話は、当時仏教が広まるに際して何が必要と考えられていたかが知られる話、ということになる。

この話から導き出せる事は、こうしたことだけにとどまらない。法制史上でも興味深い事が語られている。罰金を課すに際しては選択肢が示され、罪人は任意に選択できたようである事。刑を実行する検断役は罰金の半分を役得として取得できたりし事、などである。これらのことは、当時の法律(幕府法や公家法)に照らして考えねばならない事である。調べた結果、該当する法律がないのであればこうした説話から知られる貴重な情報ということになる。そうした点では、説話は色々な意味で建前ではなく本音が語られた史料といえよう。

説話集は編纂者の編纂意図によって説話が配列されているのであるから、まずは各説話を編纂意図に即して読む必要がある。しかし、そうした枠から離れて自由に読む事も許される。説話文学は当時の人々の思想・信仰を探る素材であるばかりでなく、このように法制史料としても雄弁なのである。読み方によっては別な課題が浮かび上がってくるかもしれない。関心ある方は実際に原文に当たり、自由に考えてもらうことを希望したい。それでは『沙石集』はどうすれば閲覧・入手する事ができるのか。勉強はそこから始まるのである。

入試情報

人文学部では、さまざまなバックグラウンドを持つ才能豊かな人材を選抜するため、以下の入試を行っています。

1部 日本文化学科・英米文化学科	一般入試	外国語 国語 選択
	センター利用入試Ⅰ期・Ⅱ期	3教科 3科目
	推薦入試(公募) (指定校)	書類審査 小論文 個人面接 書類審査 個人面接
2部 日本文化学科	一般入試	国語 選択
	推薦入試(公募)	書類審査 小論文 個人面接
2部 英米文化学科	一般入試	外国語 選択
	推薦入試(公募)	書類審査 小論文 個人面接

上記以外にも、社会人、海外帰国生徒・外国人留学生を対象にした特別入試を実施しています。
各学科の出願資格、出願要件および試験科目の詳細については、「入試GUIDE」または大学HP(<http://hgu.jp/>)でご確認ください。

就職情報

[2014年5月までの集計結果]

2009～2013年度 卒業生内定先・公務員登録先 (人文学部1部および2部)※順不同。誌面の関係上各業種一部のみ掲載しております。

業種	企業/団体名
建設業	東日本ハウス/タマホーム/北海道セキスイハイム/一条工務店
製造業	佐藤水産/ロイズコンフェクト/六花亭製菓/福山醸造/北海道建設新聞社/北海道アルバイト情報社/函館新聞社/大日本印刷 総合商研/久光製薬/杏林製薬/ファイザー/北海道コカ・コーラボトリング/ニトリ
情報通信業	北海道総合通信網/エヌ・ティ・ティ・ドコモ/郵便事業/日本放送協会
運輸業	北海道旅客鉄道/東日本旅客鉄道/エア・ウォーター物流/佐川急便/日本通運/ヤマト運輸/ロジネットジャパン/北海道国際航空 全日本空輸/北海道観光事業/JTB北海道/日本旅行北海道/石狩観光協会/ANA新千歳空港/国際空港事業/エイチアイエス/日本航空
卸売・小売業	栗林商会/レナウン/丸果札幌青果/玄米酵素/東日本フード/クワザワ/ほくやく/竹山/ムトウ/北海道エナジティック/丹波屋 永浜クロス/モロオ/日本出版販売/生活協同組合コープさっぽろ/イオン北海道/ラルズ/北海道ファミリーマート/札幌丸井三越 京都きもの友禅/エービーシー・マート/北葉楼/柳月ホールディングス/札幌トヨタ自動車/北海道日産自動車/ホンダカーズ南札幌 北海道三菱自動車販売/ベスト電器/ヨドバシカメラ/アインファーマシーズ/サッポロドラッグストアー/サンドラッグプラス 北海道エネルギー/ツルハ/日本トイザらス/アマゾンジャパン
金融・保険業	北海道銀行/北洋銀行/ゆうちょ銀行/みずほ証券/住友生命保険/日本生命保険/明治安田生命保険/第一生命保険/損害保険ジャパン かんぽ生命保険/三井住友海上火災保険
不動産業	ビッグ/副都心住宅販売/常口アトム/エイブル/住友不動産販売
飲食店、宿泊業	とんでん/はなまる/平和園/幸楽苑/京都吉兆/すかいらく/スターバックスコーヒージャパン/モンテローザ/ロッテリア JR北海道ホテルズ/知床第一ホテル/野口観光/東横イン/グランビスタホテル&リゾート/京王プラザホテル札幌
医療・福祉	北海道勤労者医療協会/日本赤十字社 北海道支部/北海道国民健康保険団体連合会
教育、学習支援	北海学園/練成会グループ/日本赤十字北海道看護大学/札幌市青少年女性活動協会/札幌市生涯学習振興財団/北広島市図書館
複合サービス事業	ホクレン農業協同組合連合会/道央農業協同組合/きたみらい農業協同組合
サービス業	光生舎/TBCグループ/加森観光/日本中央競馬会/カナモト/セイコーマート/日本衛生/パソナ/総合警備保障/あいプラン

公務員名称

国家公務員(一般職)/裁判所職員(一般職)/法務教官/国税専門官/自衛隊一般曹候補生
北海道職員[上級・中級(教育・警察行政)・中級(学校事務)・障がい者・一般行政・警察行政]/北海道警察官[男子・女子]/札幌市職員[行政・消防吏員]
札幌市以外の市町村職員/その他公務員/国立大学等法人職員/公立学校教員[国語・英語]

2011～2013年度 教員採用状況

2011年度					2012年度					2013年度				
教員		科目		合格者数 () 内は過年度卒業生	教員		科目		合格者数 () 内は過年度卒業生	教員		科目		合格者数 () 内は過年度卒業生
公立学校	国語	中学	0	3(1)	公立学校	国語	中学	2(2)※	6(5)	公立学校	国語	中学	3(3)※	4(4)
		高校	3(1)				高校	4(3)				高校	1(1)	
	英語	中学	3(2)	3(2)		英語	中学	1(1)	2(2)		英語	中学	3(3)	6(5)
		高校	0				高校	1(1)				高校	3(2)	
					私立学校	国語	中学	1(1)	2(2)	※内1名は特別支援学校(養学校)の中等部				
							高校	1(1)						
					※内1名は中学校の特別支援学級									

ヒューマン 2014.6 Vol.03

編集・発行:北海学園大学人文学部

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1-40 <http://human.hgu.jp/> TEL.011-841-1161(代表) FAX.011-824-7729

表紙キャッチコピー:人文学部日本文化学科1部4年 板垣梨紗さん
自国と他国について深く学び、そこで得られた文化理解と手を携えて
世界に向けて飛び立つ学生たちの未来を表現しています。

制作・印刷:(株)アイワード
PD:馬場康広(株)アイワード 2000年人文学部日本文化学科卒